

「名づけ」を用いた環境イメージの形成と共有化に関する研究
—「上町台地プロジェクト」における実践—

Stimulating Environmental Perception Shared by Citizens by Means of Tagging
Environmental Resources Intimately -Case Study of "UEMACHI-HILL PROJECT"-

○吉岡 哲* 盛岡 通** 近藤 隆二郎***

Satoshi YOSHIOKA*, Tohru MORIOKA**, Ryujiro KONDO***

ABSTRACT; An environmental image-building technique in walking tours enables citizens to improve local environmental perception. We have designed and carried out serial events in "UEMACHI-HILL PROJECT" as an effective method of developing semantic cognition of environment. In the project, "Tagging intimately environmental resources in urban spaces" is examined as one of the techniques to aid of their image-building. Participants in the event would give local environmental resources nicknames accompanied by following two effects. One is to make participants feel much more attached to the local environmental resources, the other is to build diversified environmental image. Findings are as follows: 1) "Tagging" can support participants to develop environmental image in the context of mental linkage to physical properties; 2) Participants would improve local environmental image using "Tagging" technique in their daily lives; and 3) It is important that participants share their images with each other in the "Tagging" process.

KEYWORDS; image-building, Local environmental resources, Environmental perception

1. 研究の背景と目的

市民を主体とするまちづくり、環境づくりの中で、市民が日常的な都市体験を行う「散歩」や「街歩き」は重要^{1), 2)}である。また、そのような都市体験としての「街歩き」を含むまちづくりイベントは、市民がもつ環境観を引きだし、地域に対する環境イメージを強化して育んでいくしかけとしての側面をもっている。都市体験のイベントには、市民が日常の中で気がつかなかったことを見直し、市民ひとりひとりの環境イメージを形成し共有化していく狙いがある。参加者が「街歩き」の中で都市の様々な環境資源を観察するだけでなく、より能動的に行動し自らの生活との関わりの中で環境資源を捉えることにより主体的な環境イメージをもつための手法が求められている。ここでは、まち中の身近な環境資源（ベンチ、電柱、ごみ箱、自動販売機など）をいったん日常から切り離れたモノとしての視点でもう一度評価しなおし、それらの資源の特色や周りとの関係を読み込んだ上で主体が積極的に独自の感性を用いて名前をつけるという「名づけ」が身近な環境イメージの形成と共有化のために有効であることを提言する。すなわち、大阪上町台地で行った「上町台地プロジェクト」の中で用いた「名づけ」の方法を取り上げ、その結果から「名づけ」のもつ環境イメージ形成と共有化に関する働きおよびその方法、留意点をまとめる。

2. 環境づくりにおける「名づけ」の方法とその分類

2. 1 「名づけ」による環境イメージの形成

「名づけ」は「ある事物を他の事物と区別するために名前を与えること」であり、一般的には子供が生まれたときのように、新しい事物が生み出されたときに行われる。一方環境や環境資源に対する「名づけ」は、既に名前のあるものに対して行われる「名づけ」が多く、友達や親しみのあるものに「愛称」をつけるのと同じように環境資源に「別称」を与える行為ともいえる。そういった「別称」を与える「名づけ」の効果は、一つは「愛称」という言葉が示すように、その環境、環境資源に対して愛着をもつという効果である。「名づけ」を行う人が自分のライフスタイルやセンスを用いて定式化することにより各人に合わせた環境イメージが形成され、その人なりのまちへのおもいが育まれる。単なる「まち」から「私のまち」という認識の変化は、環境づくりの上での出発点となる。もう一つの「名づけ」の効果は、環境資源の多面的な価値を発掘しそれを広めるという効果である。特に人工的な事物の場合、一般的には単一の価値をもつものとして受け入れられている。例えば「自動販売機」という名前が伝えるものは「自動で商品を販売する機械」という

*大阪大学工学研究科環境工学専攻前期課程 Graduate Student, Dept. of Environmental Engineering, Osaka Univ.

**大阪大学教授 工学部環境工学科 Prof. of Osaka Univ., Department of Environmental Engineering.

***和歌山大学講師 経済学部 Assist. Prof. of Wakayama Univ., Department of Economics.

単一の価値でしかない。しかし、現実の自動販売機の存在は街路の景観に与える影響、電力消費に与える影響など多方面に影響を与え、多面的な価値をもっている。「名づけ」によってそういった単一の価値でしか環境資源を見ていなかった市民が、違う見方に気づき新たな価値が掘り出される。そういった市民の個人的な関わりや個性的な視点を反映した「名づけ」を集めて多面的な見方をするにより新たな環境イメージがつくられるといえる。

2. 2 環境イメージ形成および共有化のための「名づけ」手法の分類

「上町台地プロジェクト」において、いくつかのタイプの「名づけ」の方法を試みた。それらのタイプの各々が参加者の環境イメージの形成や共有化に関して違った影響を及ぼす。それを「名づけ」の過程の中で図1のような視点から分類した。以下に各々の意味を示す。

a) イベントー日常

イベントでの「名づけ」はイベントのコンセプトや他の参加者などの場の影響を受ける。また、住民や来訪者など様々な立場からの「名づけ」をイベント実施地域の環境資源に対して集めることができる。一方日常の「名づけ」は個人的なもので他人の影響を受けない。個人の生活行動の中での「名づけ」が行われる。

b) 個人型ー共有型

個人型は個人の中で完結する「名づけ」であり、他の参加者の影響をあまり受けない。主に「名づけ」をした本人の環境への愛着と認識を深める効果を狙ったものである。一方共有型はイベントの中などで他の参加者の視点や「名づけ」の影響を受けながら「名づけ」を行い、様々な見方ををすりあわせる過程をもっており、ある特定の環境資源に対する多面的な見方を浮き上がらせることを狙ったものである。

c) 点資源ー線資源ー面資源

対象とする環境の広がりから点資源、線資源、面資源という分け方ができる。ごみ箱、ベンチなどの点資源は「名づけ」がしやすく基礎的な「名づけ」の方法である。点資源への「名づけ」では具体的なものと直接結びついているために、そのものを直接体感した「知覚象」が現われやすい。一方、通り、コースなどの線資源や、区域全体などの面資源への「名づけ」は様々な要素を含み「名づけ」の対象が明確でないため「知覚象」より「心象」が「名づけ」に現われやすくなる。

d) 資源特定型ー資源発見型

「名づけ」を行う対象を予め決めておく資源特定型は、特定の資源に対して複数の人の見方を集めるための方法である。また「名づけ」を行う環境資源も参加者が発見する資源発見型は、「名づけ」を行う人がどのような資源を発見するかという点も引き出す方法である。

e) 既存の「名づけ」の有無

資源特定型の「名づけ」の場合、その資源の一般名とは別に参加群やスタッフによる「名づけ」を行い「イベントでの名前」を示す方法と、一般名以外の名前のないものに新たに「名づけ」を行う方法がある。示された「イベントでの名前」は、「名づけ」の例となって「名づけ」のやり方を暗に示すことができる。また、その「イベントでの名前」が後から「名づけ」を行う人に影響を与える。

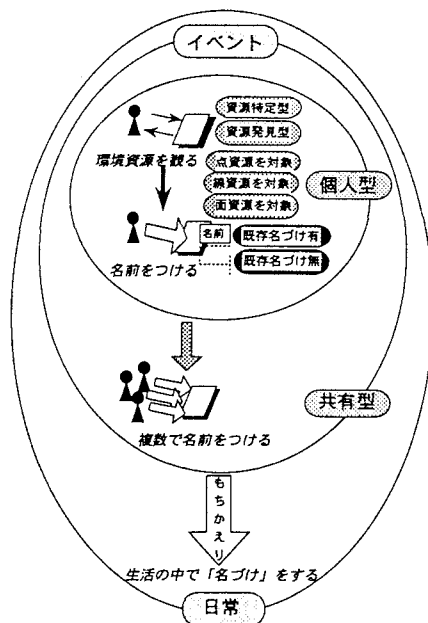


図1 「名づけ」行為の過程と分類の視点

3. 「上町台地プロジェクト」における「名づけ」の実践

市民が地域を見直す体験をする「まち巡りイベント」³⁾として「上町台地プロジェクト」の実践を行った。その概要を表1に示す。プロジェクトの中で、第1回から第4回までは、上町台地の地域性、歴史的、空間的な文脈を重視し、抽出されたテーマを参加者が再認識することを狙いとしており⁴⁾、企画側が一つの環境の見方・視点を提示し、参加者が同じ視点から評価することによりテーマを共有することをめざした³⁾。

一方第5回、第6回および第5回目以降発足した「なにわ町方あきんど会」の活動においては「名づけ」というしかけを中心としたコンセプトで、参加者の多様な環境の見方を引き出すことを狙いとしており、「名づけ」を通して参加者が様々な環境へのおもいを表現することをめざした。

表1 「上町台地プロジェクト」の概要

	名称	実施年月日	内容	名づけ
第1回	九輪の台地・春分の日	1990.3.21.	「太陽」をテーマに生國魂神社から四天王寺までをウォーキング	有り
第2回	九輪の台地・秋分の日	1990.9.23.	「緑」をテーマに生國魂神社から四天王寺までをウォーキング	有り
第3回※	上町台地水めぐり	1991.3.21.	「水」をテーマに高津神社から四天王寺までを竹筒を持ってウォーキング	無し
第4回※	おしるや難波・上町台地八坂八坂めぐり	1992.3.20.	「坂」をテーマに難波中央公園から金犀小まで長鈴を持ってウォーキング	有り
第5回※	上町環境算盤勘定	1992.10.18.	グループでテーマを決めて天王寺区南部地域を歩き回り環境資源を発見し、名づけ、まとめ、発表を行った	有り
第6回※	環境商人手習い塾・名づけ塾	1993.3.7.	金犀小を起終点に阿倍野区丸山地区を走るコースを時計回り、反時計回りに別れてウォーキング	有り
第5回	なにわ町方あきんど会	1992.10.18.~	「上町環境算盤勘定」後発足、イベントでの行動を日常化し環境資源の発見、名づけ、発表を行っている	有り

※第3回から第6回は大阪市環境再発見ウォーキングの第1回～第4回として実施

「名づけ」の方法は次の通りである。第1回と第2回はアンケートにより「今日歩いてきた道に名前をつけるとするとどのようなもの良いでしょうか」という質問で、イベントで歩いたコースに「名づけ」を行った。第4回は坂めぐりの9つのポイントの内の2つめと9つめのポイントで、坂に対して「名づけ」をしてその場でカードに記入したものを回収し、ウォーキング終了後会場に結果を張り出した。第5回はグループごとに環境資源のテーマを決めて、区域の中を自由に歩き回って環境資源を発見し「名づけ」という方法を行い、ウォッチング終了後地図にそれらの「名づけ結果」をまとめて他のグループに対して発表を行った。グループのリーダーに対しては、事前(1992.9.23.)に予備イベントを行い、方法を習得できるように準備した。また、共通に「名づけ」をするポイントや、予め事務局で「名づけ」をした資源を再訪するポイントも設定した。「名づけ」のテーマとなった環境資源はベンチ・ごみ箱／柵・塀・街灯・電柱／サイン・看板・おもしろコピー／生き物／変わった建物／路上の落とし物であった。多彩な資源に個性的な名前が集まり、設定されたテーマにとらわれず別の環境資源にも「名づけ」を試みている例も見られた。第6回は予め「なにわ町方あきんど会」のメンバーがコースを歩いて(1993.2.4.)、発見し「名づけ」をした資源の中から7ポイントを選びだし、「名づけ」た名前をボードに張り出しておき、そのポイントで他の参加者が「名づけ」をして「名づけ札」に記入してボードに貼っていった。ここでは同じ資源でも個人個人で様々な見方で多様な「名づけ」が行われ、また他の人の名前からイメージを受けとったり、イメージをふくらましていく様子が観察された。第5回のイベント以降発足した「なにわ町方あきんど会」においては、会員個人が生活の中で発見した環境資源に「名づけ」をして、写真およびイラストで状況を示し「名づけ」の理由と共に「引札」というカードにまとめて事務局に報告するという形で活動を継続している。これらの「上町台地プロジェクト」における実践例と前章での「名づけ」の手法の分類との関係を表2にまとめ、各々の「名づけ」結果の例を表3に示した。また分類の視点のうちb.c.の2軸についてまとめたのが図2である。特に共有型の「名づけ」と個人型の「名づけ」について、それぞれ「環境商人手習い塾」「なにわ町方あきんど会・引札」の結果を用いて次章で分析する。

表2 「上町台地プロジェクト」における「名づけ」の手法

実践例	方法	イベント/日常	個人型/共有型	点/線/面	資源特定/発見	既存名づけ
九輪の台地・春分の日	アンケートで歩いたコースに名づけてもらう	イベント	個人型	線	特定	有
九輪の台地・秋分の日	アンケートで歩いたコースに名づけてもらう	イベント	個人型	線	特定	有
おしるや難波	坂への名づけをカードに書いてもらい回収	イベント	個人型	点	特定	無
上町環境算盤勘定・大引札	テーマを決めて区域を歩き回り地図上にまとめて発表	イベント	共有型	面	発見	無
上町環境算盤勘定・共通名づけ	区域の中にある資源に名づけてもらう	イベント	個人型	点	特定	無
環境商人手習い塾	コース上の7つの資源に名づけてもらう	イベント	共有型	点	特定	有
なにわ町方あきんど会・引札	発見した資源に名づけて写真、理由と共にカードで報告	日常	個人型	点	発見	無

表3 「上町台地プロジェクト」における「名づけ」結果例

名称	対象資源	名づけ例
九輪の台地	コース	夕陽のみえる道、落日と共に歩く道、緑と憩いの道、坂のある道、やはり歴史の散歩道
おしるや難波	坂(2ポイント)	(2の坂)くわり坂、石垣坂、天神坂、ラッコ坂(9の坂)見晴らし坂、大谷坂、眺坂、歴史の坂、落日の坂
上町環境算盤勘定	身近なモノ	(ごみ箱)本日休養、雄座ごみ箱、天まで届け(ベンチ)ばくちも休みたいベンチ、マナ板のこい、小鉢の便座
	(6テーマ)	(電柱)あなたたよりにしてまっせ(街灯)孤独の人(看板)ケア・ワ・ビ・ス・オ・の・背・筋・が・曲・が・る(生き物)緑の用心棒
		みどりの居間(建物)空中庭園、笑福亭夢遊いびん、ス・キ・ム・エ・デ・バ・、(路上の落とし物)一億圓なり、煙めく星座
環境商人手習い塾	身近なモノ	(ガス)町の博物館、名右衛門、平成の宝物(地蔵)土地対面協力地蔵、町の守り神(電車)夢電車、町電車、走る広告塔
	(7ポイント)	(羊)仲良し羊、電車ごっこ、酒好きの羊、古き夫婦(木)みあげの木、気になる木、ほこらの守り侍、ふんばる木
		(坂)Tバック、夫婦坂、七曲がり見晴らし坂、しんどい坂(眺め)眺め千両、阿倍野で六甲を見よう、望土西海
なにわ町方あきんど会	自由	(看板)空の立看板(祠)草合地蔵(植物)森のくろくろ(歩道橋)南北結魂橋(野芭蕉)風の後の静けさ、(建物)段々屋敷
		(道路)参拝道は内環状線(眺め)城見橋(ベンチ)風呂屋の腰掛(餅屋)めぶきの塔(設備)屋外機のロゴ(石像)門番の猿

4. 個人型「名づけ」と共有型「名づけ」

4. 1「環境商人手習い塾」の「名づけ」の分析

共有型の「名づけ」という方法の場合そこでつけられる「名前」は図3のような要素を持つ。それぞれの要素は以下のような内容である。

- a)環境資源(環境資源のどこに着目しているか)
 - (1)機能 資源のもつ元々の機能
 - (2)状態(全体) 資源(主テーマ)全体の形状
 - (3)状態(細部) 資源の細部の形状
- b)固有イメージ(着目している点への形容の記述)
 - (1)役割 資源に期待される役割
 - (2)形状(全体) 全体の形状の形容
 - (3)形状(細部) 全体の形状の形容
- c)既存知識(たとえ等に使われている知識の記述)
 - (1)連想 資源の特徴をたどえたもの、資源から連想されたもの
 - (2)考察 資源の原因等の考察、推測
- d)周囲の環境(資源の周囲に関する記述)
 - (1)周囲 周囲の環境、イベント、天候、季節などの影響
 - (2)地名 所在地などの地名
- e)自分との関係(「名づけ」た人と環境資源の関係に関する記述)
 - (1)評価 「名づけ」た人による資源の評価
 - (2)関わり 「名づけ」た人と環境資源との関わり
 - (3)願い 「名づけ」た人の資源に対する願い
- f)つけられている名前(資源の既存の名前に関する記述)
 - (1)元々の名前 資源の元々の名前
 - (2)イベントの名前 イベントでつけられていた名前

	個人型	共有型
点資源	なにも町方あきんど会・引札 おしてるや農産	環境商人手習い塾・名づけ編
線／面資源	九輪の台地・春分の日 九輪の台地・秋分の日	上町環境算盤塾定

図2 各「名づけ」手法の実践

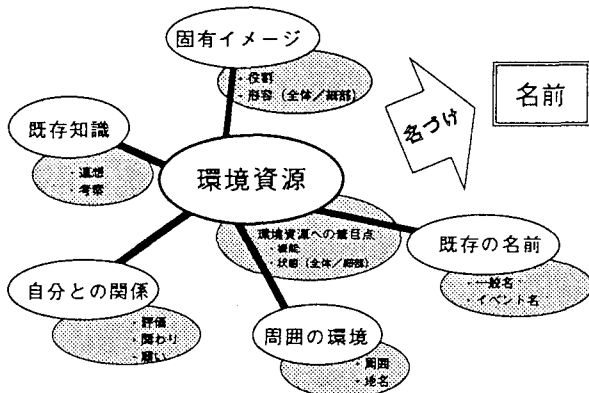


図3 環境の見方と「名づけ」

また「名づけ」によってできる「名前」を修辭法的に見たのが図4である。環境資源を観察して形容する段階から、特徴から連想して他のものにととる明喩、直喩の段階、完全にたとえたものに置き換える狭義の「名づけ」である隠喩の段階まで様々な表現が可能である。

「環境商人手習い塾」の7つのポイントの環境資源への「名づけ」結果の中に、図3に示した各要素がどの程度含まれていたかを分析したのが図5である。環境資源への着目点としては全般に機能そのものに着目したものは少なく、

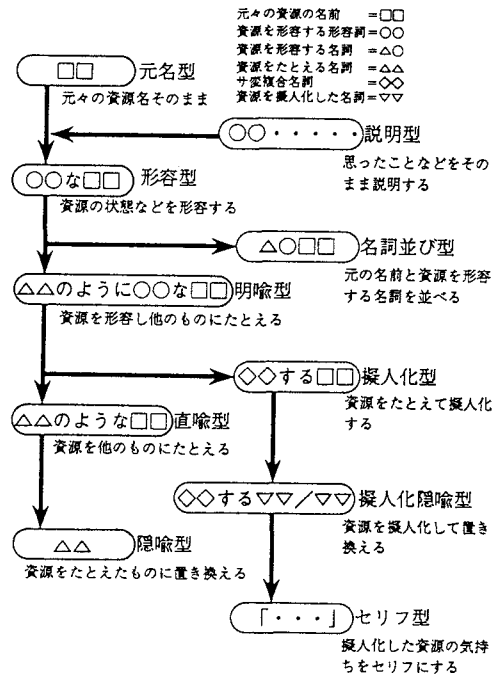


図4 「名前」の型とその変化

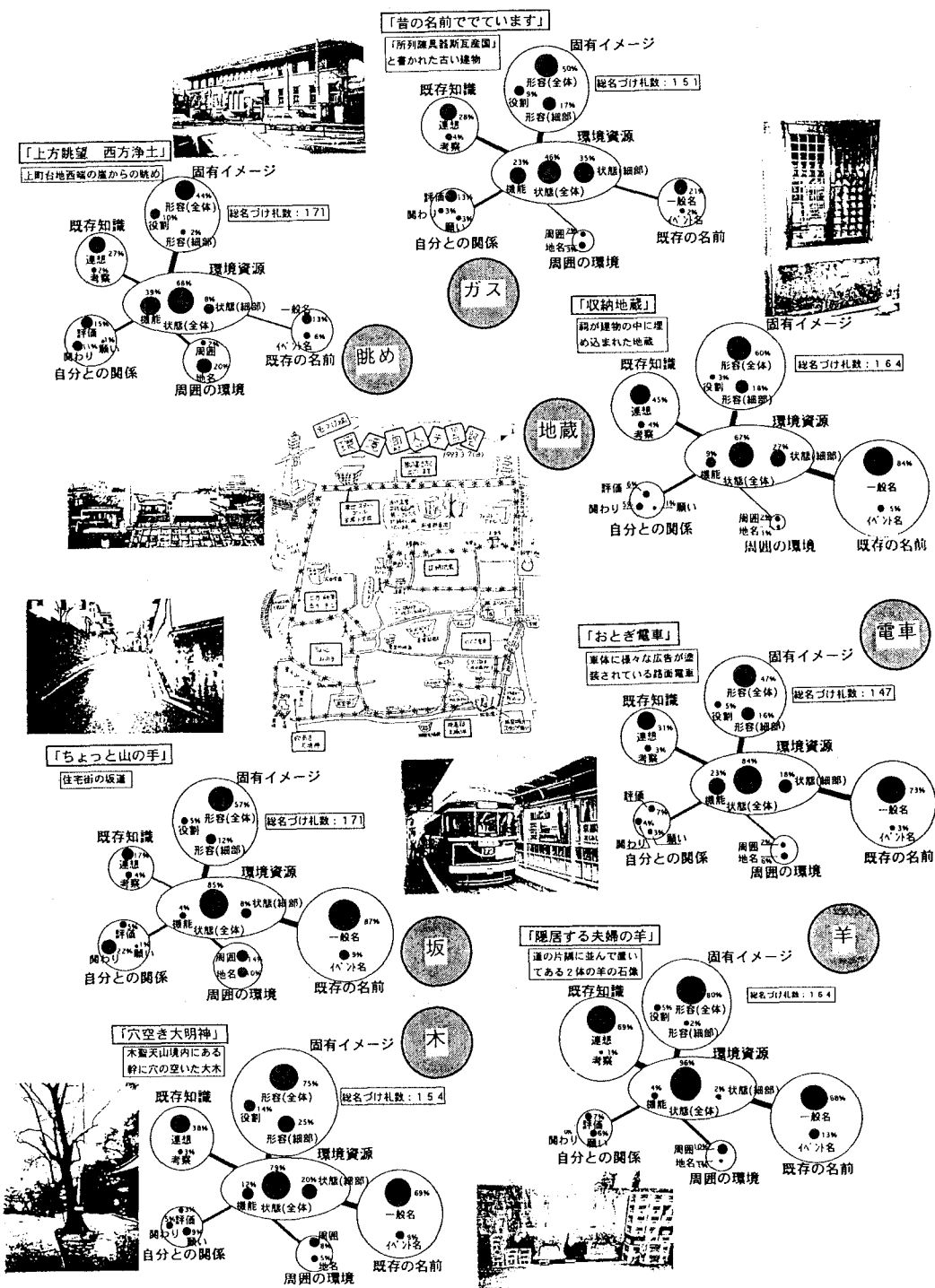


図5 「環境商人手習い塾」の「名づけ」結果にみる環境の見方

全体的な状態（形状など）に着目した例が多かった。機能への着目ももっとも多かったのは見晴らすことができるという点に着目した「眺め」のポイントである。細部の状態への着目ももっとも多かったのは看板や文字の書き方に着目した「ガス」のポイントであった。もの珍しさが優先する「羊」の場合ほとんどが全体の状態への着目であった。その他、連想については擬人化されやすい「羊」が一番多くついで「地蔵」であった。周囲の環境については、近くのビルケースに着目した「羊」と周囲の町並に着目した「坂」が多かった。自分との関わりが突出していたのは「坂」のポイントで坂を歩くことによる体感が強く「名づけ」に影響した。元の名前は、「眺め」と「ガス」以外は高い割合で残って「名づけ」に影響を及ぼした。イベントでの名前の影響が最も強く見られたのは「羊」のポイントであった。

また、同じ内容の「名づけ」でも修辞法による名前の型のバリエーションが見られた。一例を挙げると「ガス」のポイントで看板の書き方が中国と同じであるという「名づけ」には「中国とおなじやなー」という説明型、元の名前と組み合わせた「中国産瓦斯器具陳列所」、「中国製品の陳列部」のようである」という直喩型、「中国の街角」「中国に来たみたい」「ちょっと中国に来たの」といったもの、完全に隠喩にした「天安門株式会社」などがあった。当日の「名づけボード」の様子を写真1に示す。

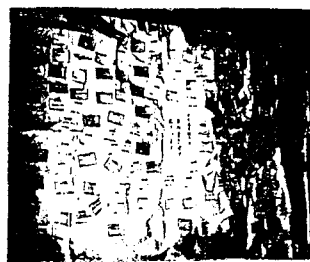


写真1 「名づけ」ボード

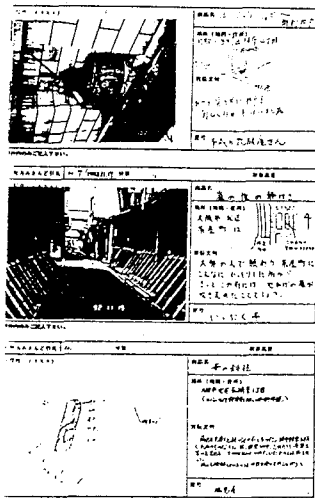


写真2 報告された「引札」の例

4. 2「なにわ町方あきんど会」の「引札」の分析

日常的で個人型の「名づけ」手法として「なにわ町方あきんど会」の「引札」による報告を取り上げる。その「引札」の例を写真2に示す。本来この「なにわ町方あきんど会」は第5回のイベントで行った「名づけ」の手法を用いた環境の見方の「もちかえり」⁶⁾を狙ったものである。「引札」による報告のあった地域を報告者の居住地との関係で、町内、区内、市内、市外に分け、第5回イベント後(1992.10~12)、第6回イベント前(1993.1~3)、第6回イベント後(1993.4~6)、定着期(1993.7~)について示したのが図6である。初期には自分の身の回りからということで町内の報告の多い人や、奇異なものを遠くで発見してくる人など様々であったのが、次第に生活行動の中でのちょっとした発見を報告するように定着していったものと考えられる。また、住んでいる地域だけでなく区内、市内など広い範囲のまちに興味をもち「名づけ」が行われたことを示している。

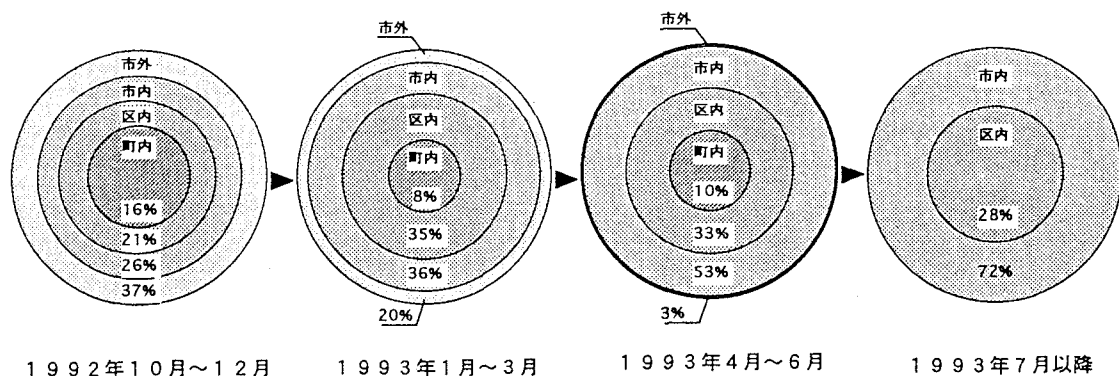


図6 「引札」の報告地域の変化

「名づけ」を行う対象となる環境資源が多様であることも多様な環境イメージの形成にとって重要である。西村らは心象の構成要素として、物的構成要素と心的構成要素があるとし物的構成要素を26に分類している⁶⁾。「引札」によって報告された環境資源をその物的構成要素で分類した。但し26の内「限定しない非歴史的建物（一般名で想起される建物）」は、個別の環境資源を対象にする「名づけ」の対象とはならないので

省いた。また新たに標識、看板などから発信される「情報」と存在自体が興味の対象となる「意味不明物」（路上観察学会でトマソンと呼ばれるものなど）を追加した。それらの分類項目別の報告数を図7に示す。標識、看板などからの「情報」とごみ箱、自動販売機などの「実用的設置物」やビルなどの「非公公共建築物」の報告が多いという特徴がある。都心部で少ない自然の要素および季節的な風景、研究室、工場ラインなどの「内在施設」以外のすべての要素の報告があった。これらの多様な物的構成要素を対象に様々な心的構成要素を読み込んだ「名づけ」が行われており、「名づけ」が物的構成要素と心的構成要素を結びつけて環境イメージを形成する手法として有効であることがわかる。

5. 環境イメージ共有化のための手法

「名づけ」を用いて形成された環境イメージの共有化をはかるための手法を図8にまとめた。

第1には「名づけ」をした環境資源と「名前」による環境イメージを他の人に伝えていく手法である。これには口頭やメディアを通して伝える「発表」と誰かが「名づけ」した環境資源を直接訪れる「再訪」がある。「発表」については、口頭では第5回の「上町環境算盤勘定」において、メディアを使ったものとしては「なにわ町方あきんど会」の会報「まちなど」紙上を利用した「引札」の紹介を実践している。「再訪」は第5回の中で共通通過ポイントとして事務局が「名づけ」をしたポイントに参加者に見てもらう試みや、第6回「環境商人手習い塾」において下見でつけたポイントの名前を張り出して参加者に見てもらうという形で実践している。

第2に一つの環境資源に対して複数の人々の視点でイメージをふくらましていく手法として「共通名づけ」がある。「共通名づけ」は元々名前のない環境資源に「名づけ」をする場合と、予めつけた「名前」がある環境資源にさらに他の「名づけ」を行う場合に分けられる。前者は第5回における「共通名づけポイント」において、後者は第6回の各ポイントでの「名づけ」において実践した。

第3にはより多くの人と関わりをもち環境イメージを共有しやすいものにするために面的イメージをつくる手法である。これには直接面的な資源に「名づけ」をする手法と、点資源への「名づけ」を地域的に集めて面的なイメージを構成していく手法がある。これの前者は第1回、第2回の「九輪の台地」でのコースへの「名づけ」や、第5回で自由課題とした全体地域への「名づけ」で、後者は第5回にグループで地図にまとめた「大引札」や「なにわ町方あきんど会」で集まった「引札」を第6回のイベント時にイベント実施地域についてまとめて展示するという形で実践した。

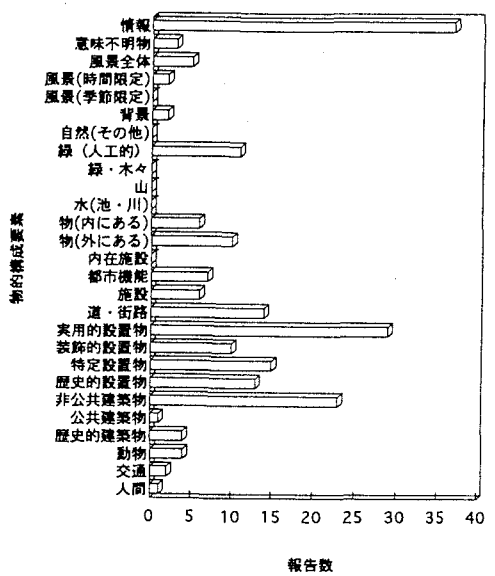


図6 引札で報告された環境イメージの物的構成要素

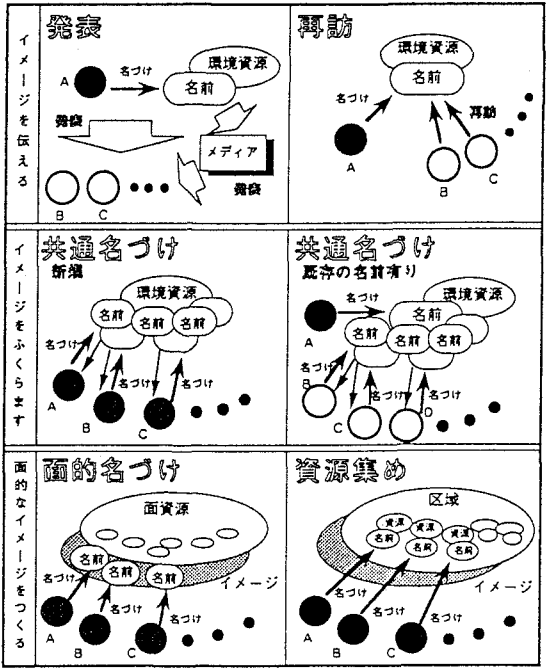


図8 「名づけ」を用いた環境イメージ共有化の手法

6. まとめ

「上町台地プロジェクト」における実践を通して「名づけ」が市民一人一人の環境へのおもいを表現する手段、あるいは市民の多様なおもいを引き出す方法として有効であることが確認できた。以下に「名づけ」の手法の特徴、留意点をまとめる。

1) 「名づけ」は物的構成要素と心的構成要素を結びつけて環境イメージを形成することを助ける手法である。

環境イメージの形成要因としては、具体的な環境資源の状態や機能などの物的構成要素と人間側の個人的特性や環境資源と人間の関係性に起因する心的構成要素がある。「名づけ」は具体的な環境資源を特定し自分なりの視点、おもいを持つことにより物的構成要素(機能、状態、周囲)を心的構成要素(役割、形容、連想、考察、願い、関わり、評価)と結びつけて主体的な環境イメージ形成を助ける方法である。特に自分との関係性の部分を引き出すには坂のように参加者が観察以外の体感をできるようにしなければ必要である。

2) 「名づけ」による「名前」は他の「名前」の影響を受ける

「名づけ」による「名前」は環境イメージを構成する物的要素と心的要素と共に、その事象の一般名やイベントで「名づけ」をした「名前」、周囲との関係性を示す「地名」などの影響を受ける。このことは「名前」を通して周囲に環境の見方、環境イメージを伝えることが可能であることを示している。また、イベントでの「名前」によって、暗に「名づけ」の方法を伝えたり、刺激を与えることが可能である。但しあまり既存の名前に引ばられて、他の人が主体的な「名づけ」をしなくならないように注意する必要がある。

3) 「名づけ」の手法は日常生活の中で定着させることが必要である。

「名づけ」の手法を日常的に継続することにより、環境の見方を深め、より多様な環境イメージを形成していくことが必要である。「なにわ町方あきんど会」による実践では、自分の居住地域だけにとどまらず生活の中の様々な行動圏で「名づけ」が行われた。居住地区以外でも主体的に環境に関わる人がいることにより、住人の視点と住んではいないが関わりの深い人の視点の双方を引き出し重ね合わせていくことができれば新しい環境イメージをつくることが可能となる。

4) 環境イメージの形成および伝達の手法としての「名づけ」

環境文脈的役割をデザイン的な視点で分けると(1)萌芽型役割(2)提案型役割(3)評価型役割(4)発表型役割の4類型がある⁷⁾。参加群からの環境イメージの生み出しを狙う萌芽型においては、参加群の自主的な環境イメージの形成を助ける手法として環境資源発見型の「名づけ」を用いることができる。あるベクトルを持つ枠の中で自由なアイデアを引き出す提案型においては、環境資源特定型の「名づけ」あるいは、テーマを設定しての環境資源発見型の「名づけ」を用いて参加群から自由な環境イメージへの提案を引き出すことができる。また、ある環境イメージのモデルを提示し参加群からの評価を期する評価型の場合、イベントによるコンセプトや環境イメージを伝達するという側面において参加群の評価の手法としてアンケートなどで「名づけ」を行ってもらう手法を用いることができる。環境イメージを新しく宣伝する発表型の場合「名づけ」られた名前を用いて環境イメージを伝達するという手法を用いることができる。

5) 環境イメージ共有化への手法

「名づけ」を用いた環境イメージ共有化の手法として「発表」「再訪」「共通名づけ」「面的名づけ」「資源集め」を提示し「上町台地プロジェクト」においてそれぞれ実践した。環境イメージの共有化を狙って「名づけ」の手法を用いる際の留意点としては、「名づけ」を行った人が形成した環境イメージを発表できるプロセスを持つことと、「名前」と環境イメージの結びつけを明らかにするために「名づけ」の理由をはっきりと明示することが挙げられる。また資源発見型の「名づけ」の場合、他の参加群の「再訪」を可能にするように環境資源の場所を明示することというルールを伝達することを強調しておきたい。

参考文献

- 1) 吉川仁、中村昌広：「散歩」と「街歩き」による都市体験に着目した都市づくりに関する基礎的研究—杉並区民の街歩きから—、第24回日本都市計画学会学術研究論文集、pp499-504、1989
- 2) 盛岡通：身近な環境づくり—環境家計簿と環境カルテ—、日本評論社、1986
- 3) 近藤隆二、盛岡通：コンセプトの純化と展開からみた市民参加型のことおこしに関する研究—大阪上町台地/太陽・緑・水—、環境システム研究、VOL.19、pp189-195、1991
- 4) 近藤隆二、盛岡通：コンセプトと多義性からみた「まち巡りイベント」の参加者意識への影響とその手法化に関する研究、第22回環境システム研究発表会、1994、本研究発表会にて発表
- 5) 近藤隆二、盛岡通：「もちかえり」の効果に着目したイベント型まちづくりに関する研究、土木計画学研究VOL.14、pp169-174、1991
- 6) 西村匡達、松本直司、寺西敏敏：都市の心象風景の形成・想起要因に関する研究、第27回日本都市計画学会学術研究論文集、pp721-726、1992
- 7) 近藤隆二：環境イメージの発達過程における役割行為の意義と効果に関する基礎的研究、大阪大学大学院工学研究科環境工学専攻博士学位論文、1994